

いけばな文化

いけばなの始まりは遠く室町時代、武士の間で書院造りという現在の日本家屋の原型となる建築様式が確立され、この書院造りの床の間の飾りとして「たて花」という最初のいけばなの形がうまれました。

と深いかわりがあります。「床の間」という座敷を飾る専用の空間ができ、掛け軸や香炉など置き方が規定され、花もまた床の間を飾る美術品と同様に考えられていました。

江戸時代になり武士階級では大広間のある屋敷を持つようになると豪華で大型のいけばなが要求されるようになり、「立花」が確立されます。

江戸時代も元禄の頃になると書院造りよりも簡素な「数奇屋造り」という住居が生まれます。町人達の間にも「床の間」が普及し「数奇屋造り」の小さな床の間に、より自由で日常的な「投げ入れ花」がもてはやされるようになります。それを元に「生花」が誕生した。さらにこの後、一般の住宅にも応接間を取り入れる事が流行し、これに合うような「盛花」や「投げ入れ花」

美の基準

いる姿、三に懸崖（けんがい）に垂れ下がっている姿、この三つのそれぞれの姿が美しく感じられるといいます。いけばなを生ける時にもこうした美観に逆らわず表現する事も大切です。それが花の持つている生命感を映し出す事にもなります。いけばなHPより。



化です。美の基準、ものの考え方や宗教観、宇宙観までも形成している。西洋のフラワーアレンジメントと日本のいけばな。最高の瞬間、華やかさに対し、いけばなは簡素で命の移ろいにある。足し算の美に対して、引き算の美である。線の芸術、左右非対称のバランスを愛でる文化を、わたしたちの体と心に、自然と共生する意識を受け継いでいます。つぼみの内に生けよ。

士に限らず、日本人は女も男も恩と義に尽くすのである。

「かれらは誇りが高く面目を重んずるので、名誉に関することと簡単に命を捨てることもいとわれない。同様、自分の保護と援助の下に身をおいている者のためには、無造作に命を賭ける。

かれらは侮辱や悪口を我慢しないし、また人の面前でそれを言い出すこともしない。したがっていさかいは希である。という

闘うことは

は、いさかいをする者は死を決意するからである。」とザビエルは指摘している。すべての「道」は、礼に始まり、礼に終わる。

忠義を利に貶め誹謗する輩に、和の國において無用な衝突や、揉め事をさける知恵と我慢をいつまでも持ち切れないかもしれない。

匪賊は公德心の欠片もないのが通例である。

山本七平氏は、世界の民族で奴隷制度が無いのは、日本人とユダヤ人という。

わが国は「和、義、礼、智、信」の五常が社会の倫理とし存在した「正直と忠実」があり、自然との調和、思いやりが価値として存在しているのである。闘うことは「死」を覚悟することである。

(有)西川経営オフィスサービス

中村会計

事務所便り

2012年6月25日（月）NO. 257

地域から明るい未来を作ろう